

## 学生における達成動機と抑うつおよび ソーシャル・サポートとの関連

青野明子\*<sup>1</sup> 森津 誠\*<sup>2</sup>

### The Relationship between Achievement Motive, Dejection and Social Support in University Students

Akiko Aono\*<sup>1</sup> Makoto Moritsu\*<sup>2</sup>

#### Abstract

The relationship between achievement motive, dejection and social support on university students was examined by splitting achievement motive into four constituent factors: personal, social, competition, and defiant achievement motives. It was found that personal achievement motivation reduced dejection. In the area of social support it became clear that support from brothers raised personal achievement motivation, whereas support from friends lowered social achievement motivation. Additionally, support from teachers and fathers was shown to lower dejection.

#### キーワード

達成動機、抑うつ、ソーシャル・サポート

#### Keyword

achievement motive, dejection, social support

#### I. 問題と目的

学生の「やる気」をどのように引き出すかについては、全ての教育関係者にとっての関心事であるといえるだろう。近年、臨床心理学、教育心理学、精神医学などさまざまな分野において、無気力、無力感、抑うつなど、充実感の欠如した精神状態が問題とされている (Beck, 1967; Hammen, 1980; 津田他, 1978; 大原1981, 大芦他, 1992など)。

---

\* 1 あおの あきこ：大阪国際大学人間科学部講師 (2006.10.6 受理)

\* 2 もりつ まこと：大阪国際大学人間科学部教授

Seligmanは学習性無力感 (learned helplessness) という現象を報告し、この現象が人の反応性うつ病のモデルとして適用できる可能性を示した (Seligman, 1972)。

一方「ものごとを最後までやり遂げたい」、「困難なことにも挑戦し、成功させたい」という動機を「達成動機 (achievement motive)」といい、その研究はMurray (1938) が人間の社会的動機の1つに「達成動機」を挙げたことから始まったと言われている。以来数多くの研究がなされる中、達成動機には「社会的・文化的に価値があるとされたものを成し遂げる」という概念が包括されてきている。これに対して堀野 (1987) はその概念を、人間の誰もがもつ「その人らしい個性的な人間にまで発展する活力 (伊藤, 1977)」と広く定義し、達成動機測定尺度を作成してその構成因子を再検討している。これにより達成動機には、他者をしのぎ、他者に勝つ事で社会から評価されることを目指す「競争的達成動機」と、他者・社会の評価にはとらわれず、自分なりの達成基準への到達をめざす「自己充實的達成動機」の2側面があるとし、抑うつとソーシャル・サポートの関連に内在する要因としての達成動機について報告している (堀野他, 1991)。

ソーシャル・サポートとは、コミュニティ心理学のパイオニアであるキャプラン Capran, G.によって概念化されたものであり、家族、友人、隣人など、ある個人を取り巻く様々な人からの有形、無形の援助を指すものである。キャプランによれば、ソーシャル・サポートを十分に利用できる人、つまり支援的な対人関係に恵まれ、いろいろな心理的・物質的援助を得られる人は、そうでない人、つまり孤立しがちで誰からの手助けも受けられない人に比べ、ストレスの影響を受けにくく、健康状態が悪化しにくい。社会心理学・看護学など様々な分野で、個人を取り巻くソーシャル・サポートの効果に関する研究がなされてきている (Bell, et, al, 1982 ; Bellings, et, al, 1983等)。その研究の発展とともに、ソーシャル・サポートは全てにおいて有効ではないことが明らかにされており (久田, 1986など)、House (1981) はソーシャル・サポートが単なる送り手の援助行動という問題ではなく、送り手と受け手の相互交渉の問題であると定義している。

前述の堀野らの研究 (1991) はこの点に着目し、ソーシャル・サポートの受け手側の内的属性の中でも特に達成動機に焦点をあて、「自己充實的達成動機」が高い場合は、日常的な落ち込みを感じることはあっても抑うつは形成しにくく、「競争的達成動機」が高い場合には落ち込みやすく、抑うつを形成する場合もあること、また抑うつとソーシャル・サポートの関係には、その個人の達成動機の質が介在するとしている。これにより、すべてのソーシャル・サポートが個人の抑うつ形成に対して効果をもつわけではなく、また個人の持つ達成動機の質によって、自分に対するソーシャル・サポートをいかせるかどうかは異なってくるとし、今後の検討の必要性を示唆している。

本研究では、心理臨床の視点による「やる気」の理解とその「しかけ」の開発という目的から、堀野他 (1991) を先行研究とし、学生における達成動機と抑うつ、ソーシャル・サポートの関連について検討していく。達成動機測定尺度 (堀野他, 1991) を用い、学生における達成動機を構成する側面を再検討すること、達成動機のどの側面が抑うつ形成に対して影響を及ぼすのかについて明らかにすることを目的とする。さらに、先行研究ではソーシャル・サポートについて、「親的ソーシャル・サポート」と「友達のソーシャ

ル・サポート」の2側面からのみ検討していたが、本研究においては、両親、友人、先生、きょうだい等、どのサポート源（サポートの送り手）からのソーシャル・サポートが、達成動機、抑うつに影響を及ぼすのかについて明らかにすることを目的とする。

## Ⅱ. 方法

1. 調査時期 2005年12月

2. 被調査者 4年制大学人間科学部の3,4回生223名（男性131名、女性92名）

3. 質問紙

以下の3種類の質問紙を授業の最後に配布、調査依頼し、その場で回答してもらい、回収した。

- ① 達成動機測定尺度：堀野他（1991）を用いた。他者に勝つことで社会的に評価されることを目指す「競争的達成動機」と、社会的評価基準にはとられず自分なりの達成基準への到達を目指す「自己充實的達成動機」の2つの下位尺度、合計24項目からなる。回答は「全然あてはまらない」から「非常によくあてはまる」までの7段階評定（1～7点）で求めた。
- ② 抑うつ・落ち込み測定尺度：堀野他（1991）を用いた。Y-G性格検査（1955）、日本語版MMPI（1966）、BDI（Beck,1967）、SDS（Zung,1965）等から引用した17項目による「抑うつ測定尺度」と、堀野ら（1991）によって「自己に対する否定的な出来事をきっかけにして軽く意欲の低下した状態であり、抑うつのように悲哀感、絶望感を伴う持続的なものではない」と定義された「落ち込み」の概念に沿って作成された25項目による「落ちこみ測定尺度」からなる。回答は「全然あてはまらない」から「非常によくあてはまる」までの7段階評定（1～7点）で求めた。
- ③ 学生用ソーシャル・サポート尺度：久田他（1989）を用いた。ソーシャル・サポートをコップ（1976）に準拠して「ふだんから自分を取り巻く重要な他者に愛され大切にされており、もし何か問題が起こっても援助してもらえる、という期待（Expectancy）の強さ」と操作的に定義し、尺度は1因子性で対人関係（サポート源）別に得点を算出する。「あなたが落ち込んでいると、元気づけてくれる」、「日ごろからあなたの実力を評価し、認めてくれる」等の質問項目に対して、回答は「父」・「母」・「きょうだい」・「今通っている学校の先生」・「それ以外の友人・知人」のサポート源別に「きっとそうだ」から「絶対ちがう」までの4段階評定（1～4点）で求めた。

### Ⅲ. 結果・考察

#### 1. 達成動機測定尺度

堀野（1991）に従い2因子での因子分析を実施した結果、想定した因子構造ではなかったため、再度4因子で主因子法、バリマックス回転の因子分析をし、4因子解を採用した（Table1）。各因子は以下のように命名した。第Ⅰ因子は「難しいことでも自分なりに努力してやってみようと思う」、「結果は気にしないで何かを一生懸命やってみたい」など、先行研究における「自己充實的達成動機」の中でも特に個人的な達成動機の意味合いが強いと思われ「個人的達成動機」とした。第Ⅱ因子は「成功するということは、名誉や地位を得ることだ」、「社会の高い地位を目指すのは重要だと思う」など、先行研究における「競争的達成動機」の中でも社会的評価を重視したものであり「社会的達成動機」とした。第Ⅲ因子は「他人と競争して勝つとうれしい」、「競争相手に負けるのはくやしい」など、特に他者を意識したものが集まっており、「競争的達成動機」とした。第Ⅳ因子は「いつも目標をもっていたい」、「何か小さなことでも自分にしかできないことをしてみたいと思う」など、新しいことに挑戦する意味合いが強く「挑戦的達成動機」とした。Cronbachの $\alpha$ 係数は尺度全体が.87、各因子は「個人的達成動機」が.80、「社会的達成動機」が.80、「競争的達成動機」が.75、「挑戦的達成動機」が.77であった。

#### 2. 抑うつ・落ちこみ測定尺度

先行研究に従い2因子で主因子法、バリマックス回転の因子分析をした。想定した因子構造があらわれたので2因子解を採用した（Table2、Rがついた項目は逆転項目である）。先行研究を参考に、第Ⅰ因子を「落ち込み」、第Ⅱ因子を「抑うつ」とした。Cronbachの $\alpha$ 係数は尺度全体が.93、「落ち込み」が.94、「抑うつ」が.74であった。

#### 3. 学生用ソーシャル・サポート尺度

男女別の平均値と標準偏差を示した（Table3）。Cronbachの $\alpha$ 係数は尺度全体が.97、「父」が.96、「母」が.96、「きょうだい」が.96、「先生」が.96、「友人」が.94であった。

ソーシャル・サポートについて男女別の検討を行っている研究もみられるが（福岡, 2001）、今回の結果では性差が認められなかった。このため合計得点の平均値を用い、サポート源別の値を比較するために、反復測定のある分散分析を行った。Table3にサポート源別の平均値、標準偏差（SD）と分散分析結果、Figure1にサポート得点の平均値を示す。分散分析の結果、サポート源別のサポート得点に有意な差がみられた（ $F(4,824)=84.70$ ,  $p<.001$ ）。多重比較（Sidak法、5%水準）を行ったところ、「父」-「きょうだい」間、「母」-「友人」間以外のすべてのサポート源の間で有意な差がみられた。

以上の結果から、学生は「友人」と「母親」からのソーシャル・サポートが多く期待できると考えており、ついで「きょうだい」、「父親」からのサポートが期待できると考えていることがわかる。「今通っている学校の先生」については、どのサポート源よりも有意に低い結果となった。大学生と大学教員との関係においては、研究の指導等の具体的な援

学生における達成動機と抑うつおよびソーシャル・サポートとの関連

Table1 達成動機測定尺度の因子分析Varimax回転後の負荷量

項目内容	個人的 達成動機	社会的 達成動機	競争的 達成動機	挑戦的 達成動機
難しいことでも自分なりに努力してやってみようと思う。	.719	.169	.104	.185
こういうことがしたいなあと考えるとわくわくする。	.655	.032	.105	.178
みんなに喜んでもらえるすばらしいことをしたい。	.556	-.081	.341	.145
結果は気にしないで何かを一生懸命やってみたい。	.555	-.137	.129	.239
人に勝つことより自分なりに一生懸命やるのが大事だと思う。	.512	-.159	-.038	.410
今日一日何をしようかと考えることはたのしい。	.480	.147	-.016	.059
いろいろなことを学んで自分を深めたい。	.389	.095	.367	.244
成功するということは、名誉や地位を得ることだ。	-.071	.761	-.078	.161
社会の高い地位をめざすことは重要だと思う。	.167	.723	.133	-.085
就職する会社は、社会で高く評価されることを選びたい。	.035	.599	.060	.133
勉強や仕事を努力するのは、他の人に負けないためだ。	.144	.584	.150	.021
今の社会では、強いものが出世し、勝ち抜くものだ。	-.137	.564	.115	.108
世に出て成功したいと強く願っている。	.340	.500	.310	.052
他人と競争して勝つとうれしい。	.262	.183	.718	.086
競争相手に負けるのはくやしい。	.083	.101	.665	.226
どうしても私は人より優れていたいと思う。	-.150	.398	.451	.284
ものごとは他の人よりうまくやりたい。	.010	.347	.448	.436
いつも何か目標を持っていたい。	.268	.197	.296	.537
決められた仕事の中でも個性をいかしてやりたい。	.248	.136	.286	.518
人と競争することより、人とくらべることができないようなことをして自分をいか	.129	.034	.018	.494
何か小さなことでも自分にしかできないことをしてみたいと思う。	.241	.098	.265	.479
何でも手がけたことには最善をつくしたい。	.355	.024	.402	.441
ちょっとした工夫をすることが好きだ。	.322	.157	.159	.403
寄与率	12.8	12.6	9.7	9.4

Table2 抑うつ・落ち込み測定尺度の因子分析Varimax回転後の負荷量

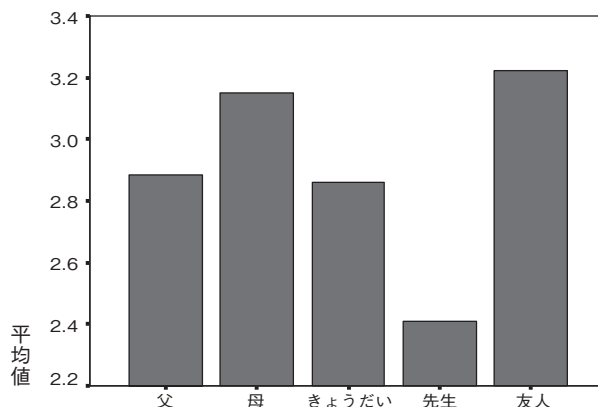
項目内容	落ち込み	抑うつ
たびたびゆううつになる。	.799	.124
ひとりぼっちだと思うことがよくある。	.744	.048
気が沈んでゆううつだ。	.732	.273
ひどく失望することがある。	.728	.133
ぼんやり考え込むくせがある。	.726	.103
たびたび元気がなくなる。	.710	.101
たびたび過去の失敗をくよくよと考えることがある。	.704	.240
理由もなく不安になることがときどきある。	.695	.063
ときどき何に対しても興味がなくなる。	.689	.040
なんとなく疲れる。	.677	.070
自分は役に立たない人間だと思う。	.665	.248
たびたびもの思いに沈むことがある。	.654	-.017
ときどき自分をつまらぬ人間だと思うことがある。	.636	.204
何かにつけてよく心配する。	.619	.237
何をするのも面倒で疲れた感じがすることがある。	.606	.220
自分の将来は暗いように思う。	.587	.299
一つの仕事に打ち込めないことがある。	.583	.069
気分にかけてしまうことがよくある。	.567	.191
人中にいてもふと淋しくなることがある。	.565	.109
自分が悪かったと悩むことがある。	.563	-.027
特別な才能も無く偉くなれそうもない。	.545	.260
失敗しないようにできることしかやらない。	.539	.189
どうなるかよくわからないことはやりたくない。	.533	.168
後悔するようなことをよくやる。	.529	-.067
時には口汚くののしりたくなる。	.528	-.051
一度しくじるとどうしても手がかずいつまでも仕事をほっておく。	.527	-.046
物事は結局自分の思い通りにならないと思う。	.513	.292
泣いたり泣きたくなる。	.499	-.054
ときどき物をたたきつけたくなる。	.450	-.050
どうせ手に入らないのだから欲しい物を得ようとしても無駄である。	.447	.102
落ち着かずじっとしてられない。	.401	-.101
人生はなるようにしかならないと思う。	.337	-.065
努力してもしなくても結果は同じであると思う。	.318	-.027
R社会に役立つ人間になると思う。	.054	.794
R役に立つ働ける人間だと思う。	.105	.703
R人に自慢できることがある。	.092	.607
R人に負けないような得意なことがある。	.141	.580
R容易く決断できる。	.018	.462
Rうまくいかない時いつまでもそういう状態は続くはずが無いと思う。	.013	.405
R生活はかなり充実してる。	.197	.363
R朝方は一番気分が良い。	-.104	.206
寄与率	29.2	7.8

助はあっても、今回用いた尺度で定義された「何か問題がおこっても援助してもらえる」などの情緒的なサポートを期待できる関係にいたることは少ないことが推察される。

Table3 サポート得点の平均値、SDと分散分析結果

	サポート得点		
	平均値	SD	F値
父	2.88	.76	84.70 p < .001
母	3.15	.69	
きょうだい	2.86	.76	
先生	2.41	.76	
友人	3.22	.61	

Figure1. サポート源別平均値



#### 4. 各尺度の相関

各下位尺度の関係をみるため、「個人的達成動機」、「社会的達成動機」、「競争的達成動機」、「挑戦的達成動機」、「落ち込み」、「抑うつ」、各サポート源についての相関を調べた (Table4、有意な数値のみ表示)。

「個人的達成動機」は「落ち込み」、「抑うつ」と有意な弱い負の相関を示した。「個人的達成動機」が高い場合には、「落ち込み」、「抑うつ」ともに低くなるといえる。「社会的達成動機」は低いながらも「落ち込み」と有意な正の相関を示している。先行研究にあるように社会的評価を重視することから、日常軽く意欲の低下した状態である「落ち込み」を経験する頻度も高くなることがうかがわれる。また達成動機の4因子は全て「抑うつ」と有意な負の相関を示しており、達成動機が高い場合は、日常的な「落ち込み」ではない、より持続的で特性的な「抑うつ」は低くなると考えられる。

次に、達成動機とソーシャル・サポートについてみると、「個人的達成動機」はすべてのサポート源に対して優位な正の相関を示している。先行研究では「自己充實的達成動機」

が高い場合にソーシャル・サポートを生かしやすいという結果が示されたが、先行研究の「自己充実達成動機」の中でも特に個人的な内容の項目である「個人的達成動機」が高い場合には、さらにその傾向が顕著であったといえよう。「競争的達成動機」については友人以外のサポートと優位な正の相関がみられている。大学生において多くの場合、競争相手は友人であることから考えると、この結果は納得のいくものであるだろう。「競争的達成動機」が高い場合には、友人を競争相手とみることで、間接的には友人との深い信頼関係を築くことが難しくなることもうかがわれる。

また、「抑うつ」・「落ち込み」とソーシャル・サポートの関係についてみてみると、「抑うつ」は全てのサポート源に対して有意な負の相関を示しているが、「落ち込み」には今回ソーシャル・サポートとの有意な相関はみられなかった。今回用いた尺度で定義された「ふだんから自分を取り巻く重要な他者に愛され大切にされており、もし何か問題が起こっても援助してもらえる、という期待 (Expectancy) の強さ」というソーシャル・サポートは、日常的に経験する比較的軽い「落ち込み」よりも、より持続的で特性的な「抑うつ」に対して効果を発揮することがうかがわれた。

Table4 達成動機、抑うつ・落ち込み、ソーシャル・サポート各尺度の相関係数

	個人的	社会的	競争的	挑戦的	落ち込み	抑うつ	父	母	きょうだい	先生
落ち込み	-.135*	.138*	-	-						
抑うつ	-.346**	-.209**	-.206**	-.177**	-					
父	.255**	-	.206**	-	-	-.213**				
母	.290**	-	.222**	.134*	-	-.155*	.731**			
きょうだい	.445**	-	.168*	-	-	-.217**	.686**	.719**		
先生	.362**	-	.150*	-	-	-.388**	.351**	.438**	.468**	
友人	.429**	-.170*	-	-	-	-.165*	.294**	.404**	.487**	.500**

\*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$

## 5. 各尺度の因果関係

各尺度の因果関係をみるため、共分散構造分析によるパス解析を行った。その結果、今回は全体的には適合の良いモデルが得られなかったが、達成動機、抑うつ、ソーシャル・サポートの因果関係を説明する有意なパスのみを図に示した (Figure2)。

まず「個人的達成動機」に対して「きょうだい」からのソーシャル・サポートが正の影響を及ぼすことが示された。同胞数が少ない、あるいは一人っ子の家族が増加する中で、きょうだい仲が良く、安定したサポートが期待できる関係であることは、より個人的な達成動機を高めることに効果的であると思われる。また「個人的達成動機」は「抑うつ」に対して負の影響を及ぼすことが明らかとなった。社会的評価や他者との競合ではなく、個人が自分なりの達成基準を目指すという姿勢をもつことには、深刻な抑うつに陥ることを防ぐ効果があることが期待できる。

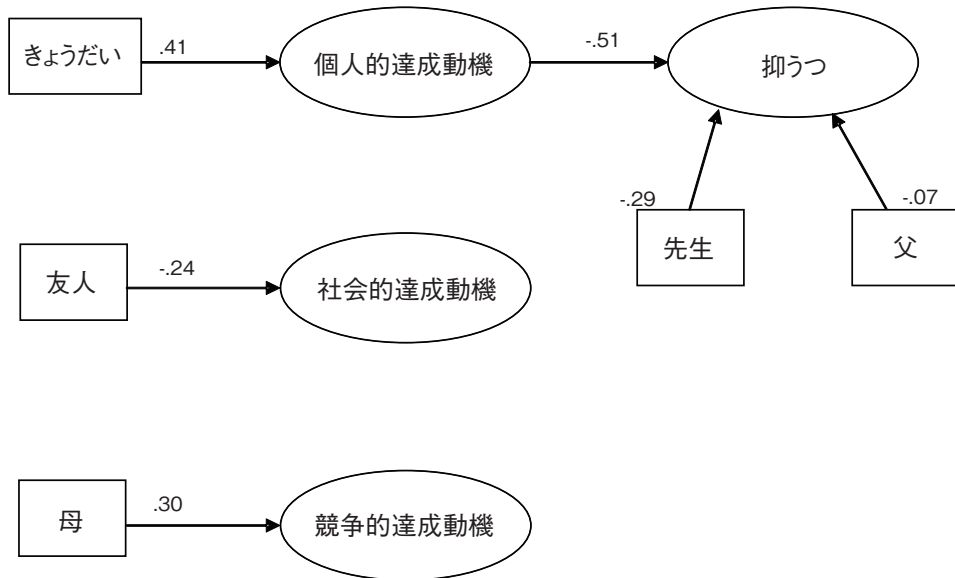
また、社会からの評価を重視する「社会的達成動機」に対しては、友人からのサポートが負の影響を及ぼすことが示された。相関分析によると「社会的達成動機」は「落ち込み」



との弱い正の相関が示されており、社会的評価、地位や名誉を重視しすぎると日常的な落ち込みを経験することが多いことが伺われる。友人とのサポート関係は、社会的達成動機に対して負の影響を及ぼし、間接的には「落ち込み」の状態から回復することに役立っているのかも知れない。さらに、「競争的達成動機」に対しては母からのサポートが正の影響を及ぼすことが明らかとなった。母親のサポートは「他人と競争して勝ちたい」、「人より優れていたいと思う」などの動機を高めていることになり、この結果からは日常の学生と母親との関係が垣間見られる。「きょうだい」からのサポートが「個人的達成動機」を高めるという結果とは対照的であり、興味深い。

注目すべきは、「今通っている学校の先生」からと「父」からのサポートが、学生の抑うつを下げることに影響しているところだろう。今回の「抑うつ」の項目をみると、「社会に役立つ人間であると思えない」、「役に立つ働ける人間だと思えない」、「人に自慢できる場所がない」という、抑うつ感の中でも特に、自分に価値を感じられない「無価値観」を表しているものが目立つ。抑うつ感の中でも「無価値観」は自殺念慮に至ることが多いといわれる臨床症状の1つである。今回の被調査者の大半は大学の3、4回生であり、進路、就職に関して思い悩む時期にあたり、多少抑うつ的になるのは当然ともいえる。特にこの時期の学生において、友人や同胞、母親からのサポートではなく、ある意味では“権威”の象徴である、大学の教員や父親とのサポート関係が、自分は価値のない人間であると思ふ無価値観を下げることに効果的であるのは、納得のいくところであろう。

Figure2 達成動機の各因子・抑うつ・ソーシャル・サポートの各サポート源との関係



#### IV. 全体的考察

本研究では、学生における達成動機と抑うつおよびソーシャル・サポートとの関連について検討した。学生における達成動機を構成する側面を再検討し、「個人的達成動機」、「社会的達成動機」、「競争的達成動機」、「挑戦的達成動機」の4因子を抽出した。これらのうち「個人的達成動機」が抑うつの形成に対して負の影響を及ぼすことが示された。

さらに、ソーシャル・サポートについて、きょうだいからのサポートが「個人的達成動機」を高め、友人からのサポートは「社会的達成動機」を低くし、母親からのサポートは「競争的達成動機」を高めることが明らかになった。また、先生からのサポートと父親からのサポートは共に、抑うつを下げる働きをすることが示された。

以上の結果から、学生の「やる気」すなわち達成動機については、他者との比較や社会からの評価ではなく、その個人が自身の価値基準でもって打ち込めるものを重視する方向に援助することが、抑うつを防ぐことにつながるといえる。また、学生が教員からのサポートを期待する度合いは他のサポート源に比べて低いが、これを上げる、つまり学生にとって教員が「自分を取り巻く重要な他者」の一人となり、「もし何か問題が起こっても援助してもらえるという期待」をもたれる信頼関係を築くことは、学生の抑うつを下げることにつながるといえよう。

本研究においては、分析の過程で達成動機、抑うつ、ソーシャル・サポートの因果関係を示す適合の良いモデルを示すことはできなかったが、今後さらに検討を重ね、モデルを提示できるようにすることが課題であるといえる。また、今回は達成動機と抑うつとの関係について検討したが、先行研究の指摘にもあるように、ソーシャル・サポートの受け手側の内的属性として、達成動機の各側面と自己概念や価値観、ライフスタイルとの関連についても、さらに研究していく必要があるだろう。

注記：本研究は大阪国際大学平成17年度特別研究助成課題『心理臨床の視点による「やる気」の理解とその「しかけ」の開発に関する研究』の一部として実施された。

#### 謝辞

本論文作成にあたり、ご協力いただきました大阪国際女子大学卒業生 高島希代子さん、調査にご協力いただきました学生の皆様に深く感謝の意を表します。

#### 参考文献

- 阿部満州他訳 1966 日本語版MMPI 三京書房  
Beck,A.T. 1967 *Depression : Clinical,experimental,and theoretical aspects*. Hoebor.  
Bellings,A.G.,Gronkite,R.C.& Moos,R.H. 1983 Social-Environmental factors in unipolar depression: Comparisons of depressed patients and nondepressed controls., *Journal of Abnormal Psychology*, 92, 119-133  
Bell,R.A.,Leroy,J.B.& Steohanson,J.B. 1982 Evaluating the mediating effects of social support upon life events and depressive symptoms., *Journal of Community Psychology*, 48, 1562-1571  
Cobb, S. 1976 Social support as a moderator of life stress. *Psychosomatic Medicine*, 38, 300-314  
福岡欣治 2001 大学生における家族および友人の知覚されたソーシャル・サポートと無気力傾向-

学生における達成動機と抑うつおよびソーシャル・サポートとの関連

- 達成動機を媒介とした検討－, 静岡県立大学短期大学部研究紀要, 14, 3-2, 1-10
- Hammen,C. 1980 Depression in college students : Beyond the beck depression inventory *Journal of Consulting and clinical Psychology*, 48, 126-128
- 久田満・丹羽郁夫 1986 大学生のストレスに関する研究 (2) 社会心理学会・グループダイナミックス学会大会論文集, 173-174
- 久田満他 1989 大学生におけるソーシャル・サポートに関する研究 (1), 日本心理学会第53回大会発表論文集, 314
- 久田満他 1989 学生用ソーシャル・サポート尺度作成の試み (1), 日本社会心理学会第30回大会発表論文集, 143-144
- 久田他 2001 学生用ソーシャル・サポート尺度, 心理測定尺度集Ⅲ, 44-52
- 堀野緑 1987 達成動機の構成概念の再検討 教育心理学研究, 35, 148-154
- 堀野緑・森和代 1991 抑うつとソーシャルサポートとの関連に介在する達成動機の要因 教育心理学研究, 39, 308-315
- House,J.S 1981 *Workstress and social support*, Adison-Wesley.
- 伊藤隆二 1977 よく生きるということ, 柏木新書
- 箕口他 1989 学生用ソーシャル・サポート尺度作成の試み (2), 日本社会心理学会第30回大会発表論文集, 145-146
- Murray,H.A. 1938 *Explorations in Personarity*, Oxford Univ. Press, 外林大作訳 1961 パーソナリティ, 誠信書房
- 大芦治・平井久 1992 学習性無力感に関する帰属理論についての研究, 心理学評論, 35, 2, 175-200
- 大原健士郎 1981 うつ病の時代, 講談社
- 津田彰・平井久 1978 動物における外傷の対処可能性と胃損傷の発生, 心理学評論, 21, 144-165
- 辻岡美延他 1955 Y-G性格検査用紙 竹井機器
- Seligman,M.E.P. 1972 Learned helplessness. *Annual Review of Medicine*, 23, 407-412
- Selye,H. 1976 *The stress of life* (rev.ed.), 杉浦三郎他訳 1988 現代社会とストレス, 法政大学出版局
- 氏原寛他編 1992 心理臨床大事典, 培風館
- Zung,W.W.K 1965 A self-rating depression scale. *Archives of General Psychiatry*, 12, 63-70